



TITLE:

ジュンガル王國とブハーラ人：内陸 アジアの遊牧民とオアシス農耕民

AUTHOR(S):

羽田, 明

CITATION:

羽田, 明. ジュンガル王國とブハーラ人：内陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民. 東洋史研究 1954, 12(6): 513-532

ISSUE DATE:

1954-01-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138989>

RIGHT:

ジュンガル王國とブハーラ人

——内陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民——

羽 田 明

一六世紀の後半、復興した東モンゴル族、いはゆる韃靼部の壓迫を受けて西北モンゴリアの奥地に逼塞を餘儀なくされ、數十年にわたつてほとんど活動を停止してゐた西モンゴル族オイラート *Oirat* (瓦剌・衛拉特)、いはゆるカルムック族 *Kalmuks* の間から、次の世紀の前半になつて、ジュンガル *Jungar* (準噶爾) 王國が勃興し、モンゴル族、いな遊牧民族として最後の華々しい活躍を演じたことは、周知の事實である。本稿では、このジュンガル勢力の發展の蔭にあつて、ブハーラ人がどのやうな役割を果たしたかについて考へてみたい。それは永い歴史的過程を通じて、絶えず見られた内陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民との關係・結びつきの解明にも役立つであらう。ただし、ここにいふブハーラ人とは、清朝でいふところ

の回部の回子・纏回、現在のウイグル(維吾爾)族、すなわちタリム盆地地方の定住イスラム教徒トルコ族にほかならない。

一七—一八世紀のヨーロッパ人は、西トルキスタンのブハーラ・ハーン國を大ブハーリア *Great Bukharia*、東トルキスタン(タリム盆地地方)を小ブハーリア *Little Bukharia* とよび、これらの地方のトルコ族住民をブハーラ人と汎稱した。これは疑もなくロシア人の用例に従つたものである。ただ、ロシア人のいふブハーラ人が實際にはほとんどいはゆる小ブハーリアのブハーラ人だつたことは、本稿で屢々引用するバッドレイも注意してある通りであるから、便宜上しばらくこの名稱を用ひることにした。cf. *Baddeley, J. E., Russia, Mongolia, China, p. 24-6, Vol. II.*

一 タランチとしてのブハーラ人

一六四三年(崇德八年)に、ジュンガル王國勃興の基礎を

おいたボガティル¹¹ホンタイシャ Bogatir-khontaisha
すなはちバートゥル¹²ホンタイジ Batur-khontaiji (田圖
爾琿台吉、一六六五年死)のもとへ派遣されたロシアの使節
イリン Din は、その「居城」Urga としてはじめて有名
なホボク¹³サリ Khobok-Sari (和博克薩里) —— タルバガ
タイ附近 —— の存在を傳へ、ここにラマ寺を建て、ラマ僧
を住まはせるために、バートゥルがブヘーラ人の農耕民を
移住させたことをいつてゐる。¹⁴⁾

次いで一六五三—七年(順治一〇—一四)に、いはゆるイ
ルティシュ路によつて、中國へ往復したロシアの通商使節
バイコフ Baikof の證言によると、かれは現在のセミパラ
チンスク・ウストカメンノゴルスク附近・ザイサン¹⁵ノ
ール湖畔などで、ホシヨト Khoshot (和碩特)部のアブライ
¹⁶タイジ Ablaitaiji (阿布賴台吉)やバートゥルの諸子の
屬下のブヘーラ人が黍・小麥・大麥・豌豆などを栽培して
ゐるのを見たといふことで、ホボク¹⁷サリ以外の各地でも
このころブヘーラ人移民による農業が急速に發展しつつあ
つたことが想像される。バイコフはこれらのブヘーラ人農
耕地を taran と呼んでゐる。タランはカルムック語で

「耕地・種子・穀物」などを意味し、¹⁸⁾現にイリ地方で一〇
萬を數へるといはれるトルコ族タランチ taranci (n) す
なはち清人のいはゆる塔蘭奇の名はこれに由來する。イリ
ンやバイコフは何もいつてゐないが、のちに、一六六七年
に、バートゥルの後繼者センゲ Senge (僧格、一六六五—
七一?)の幕廷に使したクルヴィンスキー Kulivsky によ
れば、これらの「タランチ」は、「捕虜」として、(小)
ブヘーラから「強制移住」させられたものであつた。¹⁹⁾清朝
側の記録には、一六五五年(順治二年)に、さきにハミの
使と稱して一度嘉峪關に來たことのあるブヘーラ人の克拜
といふ者が、再びやつて來てチャガタイ²⁰ハーン系のヤル
カンド²¹ハーン、アブドゥルラー Abdullah (阿布都喇)の
表文を奉り、「内地の民」十五人を送還して朝貢貿易の再
開を求めた記事が見えてゐる。このとき甘肅提督張勇がそ
の間の事情を詰問したのに對して、克拜が答へたことばの
うちに「内地の民、百五十人を探して出して送還しようとし
たが、ジュンガル部のバートゥル²²ホンタイジのために掠
奪されて、僅か十五人しか殘存者がない」(祁韻士・藩部要
略、卷一五)といつてゐるのは、右のロシア使節の證言を裏

書きするものであらう。ここで問題になつてゐる「内地の民」といふのは、アブドゥルラー・ハーンの弟で、ヘミのスルタンだつたサイド・ババ Said-Baba (巴拜汗) の中國遠征、清朝でいふ順治五・六年(一六四八・九年)の甘肅の回教徒叛亂の際にブヘーラ人の捕虜になり、その後、朝貢貿易再開の條件として清朝から再三引渡を要求してゐたものである。

ジュンガル王國の極盛期を現出し、第五世ダライ・ラマからボショクトゥ・ハーン Boshoktu-khan (博碩克特汗) のハーン號さへ與へられたセンゲの後繼者ガルダン Galdan 噶爾丹、一六七一・康熙二〇ころ—一六九七・康熙三六) は、ヘミ・トゥルファンの兩地を攻略した(一六七九)のち、ダライ・ラマの仲介で、チャガタイ・ハーン系のヤルカンド・ハーン、イスマイル Ismail (伊思瑪業勒、アブドゥルラーの弟) に放逐されたホジャ・アパク Khoja Apak 一名ホジヤ・ヒダヤトゥルラー Khoja Hidayatullah (和卓伊達雅圖勒拉) を援けて、カシユガルからヤルカンドに遠征し、いはゆるホジャ政權を樹てさせるとともに、イスマイル・ハーン一族をイリに拘禁した(一六八〇?)といふことであ

るから、イリ地方にもこのころから次第にタランチの農耕地が拓かれたのであらう。ただ、イスマイル・ハーンが果してイリに拘禁されたものかどうかを疑はせるやうな所傳もないではないし、傍々レメゾフ Reneque の中央アジア地圖を見てもイリには農耕地が存在しなかつたやうであるから、斷定はできない。レメゾフの中央アジア地圖といふのは、ガルダン・ハーンの晩年、一六九六・七年(康熙三五・六年)に、ロシア皇帝の命令によつて、トボルスクの知事の子レメゾフが多くの情報を蒐集して作つたものであるが、その基礎になつてゐるのは、カザックは別として、ジュンガル王國についてはバートル時代のロシア人の知識、ことにバイコフの報告ではなかつたかと思はれる。といふのは、當時ヤイク河・ドン河の方面にその本據を移してゐたばかりでなく、恐らくすでに死亡してゐたはずのアブライの遊牧地が依然としてイルティシユ河流域にあつたやうになつてゐたり、ザイサン・ノール Zaisan-nor 附近に「王子」センゲの遊牧地が示されてゐたりするからである。もつとも、バイコフの報告では何も觸れるところがないコブド附近の農耕地などは、確かに當時の情報によつて描か

れたものであらう。ヘルハ部を援けて康熙帝がガルダンを伐つた當時の戦記、親征平定朔漠方略(卷一三)の康熙三二年九月己酉の條には、このころモンゴリアでは清軍に壓迫され、その本據はつとにセンゲの子、ツェワンIIラプタン Tsewang-Raptan (策妄阿喇布坦) に奪はれたガルダンが「食糧の欠乏に苦しんで烏郎鳩で耕種してゐる」ことを述べ、「來春大軍を出し、コブドに遠征してガルダンを伐ちたい。もし失敗しても、その歸途、ハミに道を取り、ガルダンの納貢民であるブヘーラ人を殺し、その植ゑてゐる苗を刈り取つて、ガルダンの常産と恃むものを毀つてしまへば、自然に窮困して降伏するであらう」と献策した將軍郎談の奏文が見えてゐる。烏郎鳩はコブド西南方のウルングIIノール Urungu-nor 湖周邊の地方か、この湖水に注ぐ同名の河川の流域かどちらかに違ひない。

このころ、タランチばかりでなく、西モンゴル族の間でも、ようやく農耕に従ふ者があつたことは、ガルダンIIドルヂ Galdan-dordji (噶爾璽多爾濟) の背信を責めた康熙三六年八月己未(實錄)上諭に、かれが「その屬衆を率ゐて誠心來降したから、安插して耕種させたのに、今たちまち

その下人を留めたまま、すつかり田苗を棄てて逃げ去つた」といつてゐることからも想像される。ガルダンIIドルヂは、アブライの兄で、ホシヨト Khoshot (和碩特) 部のハーンだつたその父のオチルトゥ Ochirtu (鄂齊爾圖) が、ザイサンノール附近でガルダンに襲殺された(康熙一六・一六七七?)とき、逃れて清朝に降り、肅州邊外のブルンギル河(疏勒河)の流域に牧地を支給されたが、のち清朝に叛いてツェワンIIラプタンのもとへ走つた者である。

ツェワンIIラプタンは早くから叔父ガルダンと對立し、イリ北方のボロタラ Bolotara (博羅塔拉) 河流域を本據としてゐたといはれるが、ガルダンの死後、代つてジュンガル王國の主となると、青海・ティベットの領有をめぐつて清朝と争つた。實錄の康熙五六年(一七一七)七月戊寅の條の記事によれば、このとき清軍の前進基地バルクルから出撃した靖逆將軍富寧安は「ウルムチの地方に至つて、ブヘーラ人の男婦幼童、合計一百六十九名を捕虜にし、ウルムチ・サインタラ Sainatala (賽音他拉)・ムータラ Mūtala (毛他拉) などの處の耕地をすつかり踐みにじつて引き上げた」(實錄・康熙五六年七月戊寅)と見えてゐるから、タラン

チによる耕地の開拓も引き續いて行はれてゐたことが知られる。一七二二・三年に、ツェワンIIラプタンのもとに使し、イルティシエ河からイリ河の流域一帯を踏査したウンコフスキー Unkovsky が「三〇年ばかり前まで、カルムック人たちは全然耕地をもつてゐなかつた。現在ではブヘーラ人の捕虜ばかりでなく、多くのカルムック人たちが農耕に従事してゐる。(かれらは小麦・大麦・黍・米や南瓜・西瓜・葡萄・杏・林檎などの菓樹(野菜)を栽培してゐる。)」また耕地も次第に増加しつつある。ブヘーラ人たちは、ホルゴス Khorgos (和爾郭斯) 河の河口近くに、一寸した町をもつてゐる。」と述べてゐるのは、ジュンガル王國における農業の急速な發達を最も要領よく傳へたものである。一七二二・三年(康熙六一・雍正元)といへば、ティベツト遠征にも、青海ホシヨト部の叛亂煽動にも失敗したツェワンIIラプタンと、コブド・バルクルを前進基地としてイリ進撃の態勢を整えながらも、なほ決心が附かなかつた清朝との間に媾和の氣運が萌しはじめたところに當る。ツェワンIIラプタンについて立つたその子のガルダンIIツェレン Galdan Tsereng (噶爾丹策凌) 一七二七—四五、雍正五—乾

隆一〇)は、事實上のジュンガル王國最後の主權者である。魏源によればガルダンIIツェレンはジュンガル王國の支配を脱して獨立しようと企てたホジャIIアパクの孫のホジャIIアフメト Ahmed (瑪罕木特)を(イリに)拘禁すると同時に、「その二子ブルハンIIウディン Burhan ud-Din、ホジャIIジハン Khoja Jihan の兄弟を人質とし、ブヘーラ人數千人を率ゐて開墾し、賦税を納めさせた」(聖武記・卷四、乾隆戡定回疆記)といふことである。ブヘーラ人側の所傳では、ホジャIIアフメトが「イリのエリンIIヘビルガ Erin-Khabirgha (額林哈畢爾噶鄂拉)山」に拘禁されたのはツェワンIIラプタンの時、一七一三年(康熙五二)ころのこととされてゐる。恐らくこの方が正しく、ブルハンIIウディン・ホジャIIジハンの兄弟、いはゆる大小ホジャム(和卓木)はイリで生まれ、ガルダンIIツェレンがアフメトを釋放したのちも人質としてイリに抑留されてゐたもののやうである。いづれにしても、このころイリ河流域の開墾が大いに進んだに違ひないことは、ガルダンIIツェレンの時に、クルジャ Kutja (固爾札—寧遠城)や海努克にラマ寺を建立した事實(欽定皇輿西域圖志・卷二二、疆域五)からも想

像される。乾隆二〇年（一七五五）ジュンガル王國を滅してイリ地方を征服した清朝が、駐屯軍の食糧供給のために、タランチの利用を考へたことは當然で、一時は壊滅状態にあつたこの地方のタランチ部落（回屯）も、乾隆二五年（一七六〇）にアクスから三百戸を移住させて以來急速に復興し、乾隆三十三年（一七六八）には六千戸を數え、額徵糧九萬六千石を納めるに至つたといはれてゐる。（西域圖志・卷三三屯政、卷三四貢賦）。一方、カルムック族の農耕民化も進んだことは、祁韻士が「（イルティシユ河流域の）デルバト Derbet（Dörbät（杜爾伯特）の衆は耕牧の業を兼ねてゐる。ヘルハ（人）が専ら牧畜を産業としてゐるのとは異なる」（皇朝藩部要略・卷二二、厄魯特要略四）といつてゐるのでも明かである。デルバト部はジュンガル王國の中心勢力だつた部落である。

註

- ① Baddeley, *ibid.* p. 123.
- ② *ibid.* p. 136 seqq.
- ③ G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, S. 380.
 taran は一般にトルコ語で黍 millet を意味し、その栽培者として taranci と呼ばれるやうになつたといふ語源説が行

はれてゐる。しかしトルコ語にはタランといふ言葉は見當らないし、ブハハラ人の主要作物が小麦であるといふ事實とも合はない。元來のカルムック語と考へて差支えないであらう。
 Baddeley, *ibid.* p. 189.

⑤ 拙稿、明末清初の東トルキスタン（東洋史研究・七ノ五、一九二〇頁）

⑥ M. Hartmann, *Der Islamische Orient*, S. 299.

⑦ Baddeley, *ibid.* ciii, «ハトリマ・「歐洲殊に露西亞における東洋研究史」三九九頁

⑧ M. Courant, *L'Asie centrale aux XVII^e et XVIII^e siècles*, p. 68~69.

V. V. Bartold, *Očerki istorii semirech'ya*, p. 95.

⑨ R. Shaw, *The History of the Khōjas of Eastern-Turkistan*, p. 41.

ミューラーの傳へるウンコフスキーの報告によれば、「策妄阿拉布坦はヤルカンドのハーンと戦ひ、ハーンと多くのベク（伯克）たちと捕へて多數の住民と一緒に Calmūkey（ジュンガリア）に抑留し、かれらはそこで農業に従事して繁榮してゐる。」とあるが、嶋田氏はこのハーンをホジャリアフメトと看てゐる。参照嶋田襄平氏・「アルティシヤフルの和卓と汗と」東洋學報、三四・一一四・一一六頁

二 サルトとしてのブハハラ人

大ブハハリアの住民ばかりでなく、小ブハハリアの住民

も往々サルトの名で呼ばれたことがある。内陸アジアのオアシス農耕民が古來仲繼貿易を生命とし、商業に長じたために、モンゴル時代前後から元々「隊商長／商人」を意味するサルタウル *sarta'ul*／*sart* (カルムック語 *sarta*) をもつて稱されるに至つたものであることは更めていふまでもない。ロシアはシベリア征服の當初から、關稅を免除してブハラ人の誘致につとめたといふことで、トボルスク・トムスク・タラなどには早くからその在住者もあつたらしい。一六五五年(順治二二)、バイコフ一行に先んじて清朝にその到着を報じ、そののち更に二度、ことに第三回目の一六六九—七一年(康熙八—一〇)には、主としてブハラ人からなる大隊商を率ゐ、イルティシュ路によつて、中國に通商したセトゥクルIIアブリン *Seitkul Ablin* はトボルスクのブハラ人であつた。當時大ブハラなどの中央アジア諸ハーン國とロシアとの交渉がなほアストラハーンを中心として行はれてゐた事實からしても、ロシアの中國貿易が専らイルティシュ路によつて進められてゐた事實からしても、ロシアと中國との貿易を仲繼したこれらのブハラ人の大多數は小ブハラリアのブハラ人だつたと考へて差支

へがない。³⁾

ただ、これらの活動が目立つて活潑化したのは、ガルダンがその岳父オチルトウIIハーンを襲殺してジュンガル王國の統一を強化し、ハルハ部を脅かすやうな氣配を示しはじめた一六七七年(康熙二六)ころ以後のことで、中國の邊口ではそのために紛争も起るやうなありさまであつたから清朝はガルダンに命じて貢使をカルムック人に限り、貢使には證明書(符驗)を給付させることにした。しかし、その後も多數のブハラ人が貢使と稱してやつて來ることに變りはなかつたから、康熙二二年(一六八三)には、ジュンガル王國の貢使は、カルムック人・ブハラ人を問はず、二百人を限つて入國を許すことに改めた。これは康熙一九年以來、虎視眈々としてハルハの牧地を伺つてゐたガルダンを清朝が懷柔しようとしたことを意味するであらう。さうして、かれが一六七九年(康熙一八)、まずトゥルファン・ヘミを従へ、ついでカシュガル・ヤルカンドに遠征してタリム盆地地方をその支配下におくやうになると(一六八〇?)、ジュンガル王國の隸民となつたブハラ人たちは直接嘉峪關からも中國に通商することになつて、中國貿易は

ほとんど完全にジュンガル勢力を背景としたかれらの獨占事業化した。康熙二十三年（一六八四）に邊口に到着したガルダンの貢使が一行三千の多數に上つた事實は（實錄・康熙二十三年九月乙亥）これを物語つてゐる。ガルダンがくり返し、舊來の例に照して入關者數の制限を撤廢して欲しいと懇請したのも當然であるが、朝貢貿易を武器としてかれの死命を制しようとした清朝は、もちろんこれを許すはずもなかつたから、ブヘーラ人たちは、當時ガルダンの勢力の及んでゐた青海に道を取つて、中國西北の一貿易基地であるとともに、中國回教徒の重要な根據地でもある西寧に向ふやうになつた。まして、ガルダンがヘルへの領有をめぐつて清朝と正面から對立するやうになつた以後は、西寧や多巴の發展は一そう目ざましく、その名は一時はロシア人の間にまで喧傳されたほどであつた。多巴は西寧の邊外に、清朝勢力とジュンガル勢力との接壤・交錯地帯に新たに興つた商業都市である。

當時、中國とロシアとの間を往復したブヘーラ人たちが相互にどのやうな商品を持ち運んだものかは直接にこれを知るに足る材料がない。ただ、一六六七年（康熙六）、センダ

のもとへ使したロシアの使節クルヴィンスキー Kulivinsky の報告によると、この時、センダに寵愛されてゐたチョクルウバシ Chokur Ubashi（楚呼爾吳巴什）といふダイチが「一六六四年に、屬下のブヘーラ人たちをトムスクに派遣して交易させたが、ロシア人はその代價を未だに支拂はない。煙草の代價としての黒貂（皮）も、その他の商品の代價としての貂皮・海狸（皮）も支拂はない」といつて詰問したことが見えてゐる。ロシアの黒龍江流域進出の一つの目的が毛皮類の賣捌き市場を發見するためであつたこと、また事實、ネルチンスク條約（一六八九）の締結によつて露清間に直接貿易が行はれるやうになつて以後、毛皮類がロシアの主要輸出品となつたことは周知の通りであるから、ブヘーラ人がジュンガル王國の貢使として、馬・駱駝などとともに中國にもたらした毛皮類（後段四五頁參照）のうちには、ロシア産のものも含まれてゐたに違ひない。またウソフスキーによれば、カルムック族がロシアから輸入した品物は、様々の色の織物（毛織物？）・獺の毛皮・黒や赤の貉皮・黒貂皮・針・鋸・鏡などであつたといはれる。それらのうちにも、あるいは中國に轉賣されたものがあつたかも知

れない。

一方、ブヘーラ人がロシア人に賣渡したといふ煙草は或は中國の產物ではなかつたか。といふのは、一七二七年（雍正七）に始まつたキャフタ貿易において煙草は中國の重要な輸出品になつたが、それ以前から、一七世紀の後半から、ネルチンスクを経由しないで、中國煙草は次第に盛んにシベリアに密輸入されつつあつたらしいからである。⁹⁾ キャフタ貿易において煙草以上に重要な中國の輸出品となつたのは茶と大黃である。ことに茶は一六四八年（順治五）に、ハルハのアルティン¹⁰⁾ハーン Altin-khan の幕廷に使したスタルコフ Starkoff によつて始め、ロシアに輸入され、その後急速にロシア人の間に擴まつて、ついに中國の代表的輸出品となつたのであるが、北京を訪れるロシアの隊商が茶を仕入れるやうになつたのはやうやく一八世紀に入つてからのことにすぎない。⁹⁾ それまではやはりブヘーラ人などの手でぼつぽつ輸入されてゐたものであらう。キャフタ貿易で、茶と並んで重視された大黃の賣買を獨占したのはブヘーラ人であるが、それが十七世紀の中葉以來の事實であつただらうことはかつて論じた通りである。¹⁰⁾ キャフタ貿易を

俟つまでもなく、ネルチンスク條約當初から、絹織物や棉布 Kitaiika は中國の主な輸出品であつた。¹¹⁾ それらもブヘーラ人がロシアへ運んだ商品のうちに數えてよいであらう。

モンゴリア全部が清朝の領土になつたツェワン¹²⁾ラプタ¹³⁾ン時代には、ジュンガル王國の貢使としてのブヘーラ人はおのずから、嘉峪關を経て北京に來ることになつたであらう。ただ、來京を許される者はもちろん、肅州で貿易を許される者の數にも制限があつたに違ひないから、その他の者は勢ひこのやうな制限のない西寧や多巴に殺到するやうになつたと想像される。デュ・ハルドのシナ帝國全誌に見えるやうに、一八世紀の初期に、西寧や多巴が中國西北邊境の毛皮市場として、いな國際市場としてほとんど首位を占め、ロシアの金鑛探險隊や隊商さへここを目指すまでになつた事實は、この想像を支持する有力な材料である。またウンコフスキーは、ジュンガル王國はインド・ティベツト・ロシア・中國と通商關係を結んでゐたといつてゐる。¹³⁾ 當時ブヘーラ人の仲繼貿易がどれほど盛んであつたかを教へる一史料である。

ただ、やがて青海の叛亂を平定した清朝の支配力強化に

よつて、西寧や多巴の繁榮は過去のものとなつた。¹⁴⁾ネルチンスク條約では未だほとんど影響を蒙らなかつた中國・ロシア間の仲繼貿易も、キャフタ互市場の開設では大打撃を受けた。さうして、清朝の媾和條件に不満だつたガルダン・ツェレンが今一度モンゴリアを窺つて失敗したのち、ついに一七四〇年(乾隆五)に、ジュンガル王國と清朝との間で締結された媾和條約では、「ロシアの例の如く、四年に一度貿易する。一度の人數は二百を過ぎることができない。滞在は八十日。來京する者は、道を肅州・西安に取る。その肅州に往く者も、また四年を期限とし、人數は百人を過ぎることはできない。禁制品を除く外、買賣は自由とする。」(實錄、乾隆五年二月己卯)といふ嚴重な清朝の統制を甘受せざるを得なくなつたのである。

註

- ① Baddeley, *ibid.* p. 24~26.
- ② *ibid.* p. 13, 118, 178, 194, 244~248.
- ③ バイコフはアプライ屬下のフハラー人を道案内として中國へ往復したし、一六七六年(康熙一五)にアムール路によつて北京を訪れたロシアの使節 Spathary は、當時北京で最も活潑に貿易を營んでゐたものがアハラー人だつたことを傳へてゐる。

- ④ 拙稿・「回鹘阿布都里什特と西寧」(北亞細亞學報三、三八—四四頁)
- ⑤ Baddeley, *ibid.* p. 187~188.
- ⑥ H. H. Howorth, *History of the Mongols*, p. 649, Part I.
- ⑦ 何秋濤・考訂綏服紀略(朔方備乘・卷四六所收)
- ⑧ 所有恰克圖貿易商民。皆皆省人。由張家口販運煙・茶・緞・布・雜貨。前往易換各色皮張・氈片等物。
- ⑨ G. Cahen, *Histoire des relations de la Russie avec la Chine*, p. 63~66. (右譯・カーヘン・「露支交渉史序説」三三—三五頁)
- ⑩ *ibid.* p. 110. (譯本・六八頁)、「シチェグロフ・「シベリヤ年代史」一九六頁
- ⑪ 拙稿・「大黃のセレンガ地方原産説について」(和田清博士還曆記念東洋史論叢、五二—一頁以下)
- ⑫ シチェグロフ、前掲書、同頁
- ⑬ 拙稿・「西寧と多巴」(東洋史研究・一〇ノ五、二六頁以下)
- ⑭ H. H. Howorth, *ibid.* H. Courant, *ibid.*
- ⑮ フォリゾフ(後段五〇頁參照)によれば、ホータンの玉はインドへ輸出されたといはれる。事實ムガール期時代の玉製容器の美事なものが現存してゐる。
- ⑯ 前掲、拙稿・「西寧と多巴」

三 プーチンとしてのブヘーラ人

一六五〇年（順治七）再度ホボクIIサリを訪れたクリアピコフがその歸途同伴したバートゥルの使節は、ロシア政府に、大工二人・石工二人・鍛冶屋二人・鐵砲鍛冶二人・甲冑一具・大砲一門・鉛・金箔若干・鋸二〇挺・牡豚五頭・七面鳥雄五羽・雌一〇羽・鐘一を要求したといはれる。これに對して、ロシアは後になつて、結局金箔一〇ポンドと豚・七面鳥などを與へたに過ぎなかつたが、このころからバートゥルがロシア人技術者の利用を考へてゐたことは十分注意されてよい。一六五三―七年に、イルティシュ路によつて中國へ往復したバイコフは、當時アブライがベシユカ（巴斯庫）Besika 河畔に都市、いはゆるアブライIIキット Abtai-kit を建設中であつたことを傳へ、その職人は「中國の首府から連れて來られた者」であつたといつてゐる。果して北京の中國人であつたかどうか怪しいが、バートゥルの捕虜になつた中國人があつたことは既に見た通りであるから、中國人の技術者でアブライIIキットの建設に従事してゐた者があつたことは事實であらう。このやう

な事情からすれば、たとへ記録には見えないにしても、サルトヤランチとして、ジュンガル王國に奉仕してゐたブヘーラ人が、かれらの有するその他の技術も提供しなかつたとは到底信じられない。「三つ、もしくはそれ以上の町からできてゐるが、一・二の煉瓦造りのラマ寺以外には何もない」とイリンが傳へてゐるホボクIIサリの町、恐らく泥壁の家ばかりの町も、結局はブヘーラ人の手で作られたものであつたに違ひない。

内藤博士舊藏の寫本、秦邊紀略（卷五）の噶爾旦傳には、「ガルダン」は沙油汁を取つて硫黃とし、瀉鹵土を取つて硝を煎てゐる。この硝の色は雪よりも白い。銅・鉛・鑛鐵などは地中から出る。磧岸からは（黄）金や珠（玉）を産する。しかし退けて用ひない。馬は逸物で、その數が多く、何處にもこれに及ぶものがない。このやうに入用のものがすっかり備はつてゐるので、遠方から供給を受ける必要がなく、いろいろ工夫をこらして精密堅牢な器械を作つてゐる。例へば小連環の鎖子甲を作つてゐる。それは衣類のやうに輕便である。しかも弓で射て穴があくやうなら、すぐに工匠を殺してしまふ。またブヘーラ人（回回）に火器を教へさ

せてゐる。戦闘は第一に火器（鳥鎗）、第二に弓矢、第三に刀鎗の順序で戦はせる。甲士には火器と短鎗をもたせ、腰に弓矢をつけ、刀を佩びさせる。駱駝には大砲を乗せる。

出征の場合には、國民を三分して交代させる。このやうな様子を聞いて遠近の諸部族・諸國はみな恐れ従つてゐる。」

（讀史叢錄、二二五頁參照）と見えてゐる。一六世紀の末ごろ、未だ火器の使用を知らなかつた當時から、隣部カザック族などがその強悍を恐れてゐたカルムック族が、軍備の充實とくに火器の充實によつて、内陸アジアの遊牧諸部族の間で遂に覇を稱するまでになつた事情が窺はれて興味が深い。

朔漠方略（卷二）の康熙一八年九月戊戌の條には、はじめてボショクトウ・ハーン Boshoktu-khan（博碩克圖汗）と稱してガルダンが使を遣し、「鎖子甲・鳥鎗・馬・駝・貂皮等の物」を貢したことが見えてゐるし、同じ書物（卷二）の康熙二十二年七月戊戌の條には、ガルダンがその幕廷に使した内大臣祁他特に托して「厄魯特鳥鎗」を貢したことが見えてゐる。厄魯特鳥鎗とは斷つてなくとも、鎖子甲と並べて擧げられてゐる鳥鎗（鐵砲）はやはり厄魯特鳥鎗であつたに違ひないが、國防上秘密にするのが當然の新銳武器をこのや

うに清朝に貢獻したガルダンには、恐らくその武備を自負し、これを誇示する考へがあつたのであらう。厄魯特 Olut

へ Oghelut が清朝で西蒙古族オイラト、いはゆるカルムック族を呼んだものであるとは更めて説明するまでもない。

しかも清朝を敵として争つたガルダンが無慘な敗北を吃して以後、ジュンガル王國では一層火器の整備・改良に努力するやうになつたらしい。前後一七七年間、ツェワン・ラプタン・ガルダン・ツェレンの父子二代に仕えて重用されたスエーデン人の捕虜レナート Renat が鐵砲や大砲——

四ポンド砲一五・小口徑砲五・一〇ポンド臼砲二〇——を作つたといふ話や、ロシア人捕虜のイワン・ミハイロフ Ivan Mikhailoff が青銅鑄造所一ヶ所を建て、砲架と車とのついた大砲三門を鑄造したといふ話はこれを物語るものである。また當時ジュンガル王國の首都（ボロタラもしくはイリ）では長さ一サージェント（七尺餘）以上の大砲が製造されてゐたともいはれてゐる。恐らくこのころがジュンガル王國の文化的發展の最も著しかつた時期で、開明的な君主だつたツェワン・ラプタンはスエーデン人やロシア人の捕虜を使つて天鵝絨・綿布・紙などの製造工場を設立し、

女子の捕虜には金やその他の眞田紐を編むやうな仕事をさせ、またこのやうな仕事をかれの娘たちにも教へさせたといはれ、レナートは印刷工場まで作つたらしい。ガルダン・ツェレンに至つては、百頭の駱駝に書物を積んで移動したと傳へられてゐるほどの文化人であつた。普通にレナート地圖の名で知られてゐる二種類の中央アジア地圖の一つが、かれの手に成つたとされてゐるのも、強ち無根の傳説ではないやうである。

ジュンガル王國における火器の普及・發達は、後に清朝がイリを征服した際に、清軍が包沁と呼ばれる部隊の抵抗に相當悩まされたらしい形迹からも想像される。西域圖志（卷四・服物）によれば「包はすなはち礮」で、「包を取扱ふ人が包沁である」といふ。明かに、モンゴル語で砲 *pa'o* を訛つて *pū*、砲手を *pū-cin* といふのを寫したものに外ならないが、圖志の説明を借りれば、ジュンガルの砲は「鐵で砲身を作り、その中に硝黃や鉛彈を入れる。あるものは、高さ二―三尺、口徑三寸で、駱駝の背に積んで發射する。あるものは、高さは同じく二―三尺であるが、口徑は五―六寸もあり（明かに臼砲）、木製の砲架に乗せて發

射する。またあるものは、長さが四尺餘りもあつて、構造は中國の鳥鎗と似てをり、手で持つて發射する。」とある。また同書には、ジュンガル王國には「軍營・鎗砲等の項の事務を管理する」包齊那爾と呼ばれる官職があつたこと（卷二九・官制一）や、「ブーチンは一千戸で一オトック *otoq*（鄂拓克）をなし、三人のジャイサン *jaisan*（宰桑）の管轄下にあつた」こと（卷首・御製準噶爾全部紀略）なども見えてゐる。イリ征服後、清朝の官意が特穆爾里克 *Tumurlik* で、地中から大銅砲四・衝天砲筒八・大小砲子萬餘を發見し、これを利用したといふ記事（實錄・乾隆二十七年閏五月戊寅）も、數量的に何處まで信賴できるかは別として、やはりジュンガル王國における火器の普及發達を物語る一つの史料であらう。

しかも、一千戸をもつて一オトクを構成し、ハーンに直屬したブーチンも、藩部要略によれば、實はカルムック人ではなくて、ブヘーラ人（回族）だつたやうである。ここにわれわれはジュンガル王國の勃興・發展に果したブヘーラ人の重要な役割と同時に、カルムック族の近代的技术文化採用の限界を見出すことができるのではあるまいか。

- ① Baddaley, *ibid.*, p. 126.
- ② *ibid.*, p. 139.
- ③ *ibid.*, p. 135.
- ④ Abdoul Kerim, *Histoire de l'Asie centrale, traduite par Ch. Schefer* p. 294.
- ⑤ Baddaley, *ibid.*, clxxvii Bartold, *ibid.* 95.
 ヘルトリド「歐洲殊に露西亞における東洋研究史」四〇八頁、
 によればロシア人の捕虜は、ジュンガリアばかりでなく、東
 トルキスタン地方へも送られて、製造工業の發達に協力した
 といふ。
- ⑥ Baddaley, *ibid.*, clxviii.
 ウグリエーモフの傳へるところによれば、Tumutlukは山の
 名で、クルジャ東方にあつたガルダンIIツェレンの夏季の駐
 牧地のやうである。一七四八年のPodzoroftの報告には、ロ
 シアの逃亡者イワンIIミハイロフが青銅鑄造所を Timerlek
 河畔に建てたことが見えてゐるが、やはり同じ場所であらう。
 cf. Baddaley, *ibid.*, clxxx.
- ⑧ 包沁爲回族。準噶爾呼噶日包。以回人司職。故名之。(藩部
 要略・卷一一・雍正八年の條)

四 アルバトゥとしてのブヘーラ人

掠奪的侵入はともかくとして、ジュンガル王國がタリム
 盆地地方を征服し、ブヘーラ人をその隸民とするやうにな

つたのは、先にも一言した通り、ガルダンの時代(一六七
 九—一八〇ころ)のことであつた。このころ以後、清朝の征服
 (一七五九・乾隆二四)まで、前後およそ七・八〇年にわたつ
 て、ブヘーラ人はジュンガル王國の隸民であつた。椿園の
 西域聞見錄(卷六・準噶爾叛亡紀略)に、「回地の各城及び左
 右カザック(哈薩克)は皆ジュンガルの阿爾巴圖で、歳ごと
 に賦税を納めた。」とある阿爾巴圖は、もちろんモンゴル
 語アルバトゥ *albatu*(隸民・納貢民)の音を寫したものであ
 る。ガルダンの敗死とともに、まずハミのブヘーラ人の頭
 目ダルハンIIベクIIアブドゥルラー *darhan-bek Abdul-*
lah(達爾漢伯克額貝都拉)が清朝に服屬し(一六九七)ついで
 ジュンガル王國と清朝との爭奪地點となつたトゥルファ
 ンのブヘーラ人が清朝に降つてその保護を求め、肅州・瓜
 州に一時移住することを許された(一七二五・一七三二)や
 うなことはあつたが、タリム盆地の主要部分、いはゆる
 「六城 *Altı-shahr*」(カシユガル・ヤルカンド・ホータン・エ
 ンギル・シャル・アクス・ウシュ)の地方のブヘーラ人は、終
 始ジュンガル王國のアルバトゥだつたのである。

ブヘーラ人側の所傳によると、ガルダンの援助でいはゆる

るホジャ政權を樹立することができたホジャ・ハア・パクは、その代償としてジュンガル王國に貢納を約したが、これが動機になつてのちのちまでブ・ヘーラ人は賦税 *alban* の重荷を背負はなければならなくなつたといはれる。¹⁾ この賦税の額は毎年一〇萬テンゲ *teuge* (騰格) であつたとも、毎月四萬テンゲ、あるいは、毎月四〇萬テンゲであつたとさへ傳へられてゐる。²⁾ しかし、毎年一〇萬テンゲといふのが最も正しいであらう。といふのは、乾隆二四年(一七五九)に、新たに清軍が征服したヤルカンドの善後策を報告した定邊將軍兆惠の奏文にも、「ヤルカンド所屬の二十七城村(の戸口)は、計三萬戸、十萬餘口である。さきにガルダン・ツェレンのときには、毎年貢賦として、十萬テンゲを交納してゐた。」(實錄・乾隆二四年八月庚子)と見えてゐるからである。テンゲはティムール朝時代から中央アジア一帯で使はれてゐた銀錢で、清代には一テンゲが銀一兩に當つた。もつとも、清朝はやはりティムール朝時代以來の紅銅錢 *プル・プル* (普爾) だけを鑄造し、實際に銀錢を造つたわけではなかつた。ただ、ヤクトブリ・ハーン國時代には、再び銀錢が鑄造されたといふことで、一八七三年(同治二)にヤル

カンドを訪れたイギリスの使節フォアサイス卿一行の報告書によれば、一テンゲ銀貨は大体英貨六ペンスに相當した。³⁾ ヤルカンドのブ・ヘーラ人が貢納した一〇萬テンゲのアルバンは、錢で納めたいが、そののちジュンガル王國の支配強化に伴つて、貨幣の鑄造權がその主權者の手に收められる一方、賦税制度も次第に整へられたやうで、右の兆惠の奏文によると、一〇萬テンゲ以外には、「金税・貿易・緞布・牲畜等の税」をも納めなければならなかつたといふ。

ガルダン・ツェレン時代の「六城」の地方の賦税制度のうちで、最も詳しく判るのは、實錄の乾隆二四年七月庚午の條の兆惠の奏文に見えてゐるカシユガルの場合で、總額六七・〇〇〇テンゲの内譯は左の通りである。⁴⁾

賦 額	
一、二・〇〇〇 テンゲ	糧石 四・八六 パトマ
二、三六・〇〇〇 テンゲ	棉花 一・四三 チャラク
三、三〇・〇〇〇 テンゲ	紅花 三・五 チャラク

第一類の納税者は「種地の鄂爾托什の人等」、第二類のそれは「克色克綽克巴什の人等」、第三類のそれは「商人及び牧養者」となつてゐる。鄂爾托什 *o-erh-ta-shu* は、嶋田學士も注意されたやうに、⁹⁾ 恐らく五体清文鑑(卷二・人類第三)に「莊頭」の譯語が附せられてゐる *ortaqi* の音を寫したものであらう。克色克綽克巴什 *K'e-shih-k'e-ch'uo-k'e-pa-shi* (*Kesikcokhasi*?) は、先の兆恵がヤルカンドの善後措置を報告した奏文に見える各項謀生の人に當るに違ひないが、その原語は殘念ながら、明かにすることができない。なほ右の額賦以外に、内外の貿易者から貿易税、商人から金・銅税、園戸 *bağci* から果税を徵收したといはれる。ただ、貿易税率がブヘーラ人の場合には十分の一、外來者の場合には二十分の一であつたといふだけで總計がどれくらゐだつたかは不明である。

穀物を計量する單位。パトマ(*patman*(帕特瑪・巴特瑪)は、最初中國の「官石四石五斗に準じた」¹⁰⁾ が、間もなく五石三斗と換算されるやうになり、そののちは清一代を通じてほとんど變化はなかつたらしい。ところが、フォアサイス等の報告では、これを重さの單位とし、一・二八〇ポ

ンドに當ててゐる。¹¹⁾ ティムール朝治下の西トルキスタンでは穀物も目方で計り、斛目を用ひなかつたといふことであるから、¹²⁾ 西トルキスタン出身のヤクープ・ハーンの支配時代には、東トルキスタンにも、このやうな習慣が持ちこまれたのかも知れない。といふよりも、清朝側の記録でも、量を示すパトマと重さを示すチャラクとが一緒に使はれてゐるやうな例もあるところからすれば、パトマを斛目としたのは寧ろ中國的な便法にすぎなかつたものではあるまいか。和寧の回疆通志(卷二)に、ブヘーラ人の風俗を述べて、「衡量はない。糧穀が少なければ回帽で量るし、多ければタハル *tagat* (塔哈爾) で計る。タハルの大きいものをパトマといふ。いづれも布袋である。」と説明してゐるのによると、なほさらその疑ひが強い。¹³⁾ 一チャラク *charak* (察喇克・撒勒克) は常に「官秤十斤に準じた」。一斤を一六〇匁とすれば、一貫六〇〇匁に當る。ただ、フォアサイス等の報告では二〇ポンド(二貫四〇〇匁)とされてゐるし、¹⁴⁾ デュトゥルイユードゥ・ランスによれば、一二・五ポンド(一貫五〇〇匁)とされてゐて、必ずしも一致しない。

一方、ロシア側の史料には、やはりガルダン・ツェレン

當時の「六城」の地方の賦税として、アクスの銅・粗布 zendsen、クチャの銅、ヤルカンド・カシユガル・ホータンの金・布帛 zendsen, khams, basmas、ケリヤの砂金を擧げ、金の總額を七〇〇ランス lars (兩)、ロシアの單位で六三フント、すなわち七ポンドほどと見積つてゐるものがある。一七三二・三年(雍正一〇・一一年)に、使節ウグリユーモフ Ugriumoff に従つてガルダン・ツェレンの幕廷に行つたロシア人測量技師フィリゾフ Yakoff Filisoff の傳聞によるもので、杜撰ではあるが、なほ清朝側の史料の欠を補ふことができる。とくに、中央アジアの何處かにあるといふ「エルケティ Erketi」(事實はヤルカンド)の豊富な砂金に關する噂に動かされて、二〇年來無駄な努力を續けてきたロシア政府が、遂にその一切の企を斷念するに至つた直接の動機がこのウグリユーモフ一行の報告だつたといはれてゐるだけに、⁽⁴⁾ 少くとも産金地や産金量についての情報は信頼するに足るであらう。

もつとも、以上のやうな斷片的な史料だけでは、ジュンガル王國のアルバトウとして、ブヘーラ人が負擔しなければならなかつた賦税の全貌を知ることほもちろん不可能で

ある。ただ、カシユガルの例によれば、清朝は、ジュンガル王國時代の額賦(アルバシ)のうち、糧石四萬パトマを四千パトマに減額するとともに、商人及び牧養者に課せられてゐた二萬六千テンゲを全免したやうであるから、乾隆帝が回部の賦税は從來に較べて「十の五・六を減じた」(西域圖志卷三四貢賦)と稱して仁政を自讃したのも強ち誇張ではなく、そこから清朝の状態をもとにしてジュンガル王國時代のそれを推定することもできさうである。それならば、何故このやうな著しい相違を生じたのかと言へば、それは結局タリム盆地地方を軍事的自治領として經營し、「陝甘二省の經費の裁減と合算すれば、用兵以前に比して、年々三分の二を節約できる」(實錄・乾隆二六年二月甲子)といつて喜んだ清朝の態度と、「漢に在つては、匈奴が僮僕都尉を置いて、西域を領し、諸國に賦税せしめた如く、唐に在つては、統葉護が西域に覇となり、吐屯に命じて賦入を督せしめた如く」(西域圖志・卷三四、貢賦)、専らこの地方を收奪・掠奪の對象としたジュンガル王國の態度との間に根本的な相違があつたからにほかならない。

もちろん、ジュンガル王國時代にも、「各項の賦役に定

額があつた」(回疆志・卷四)ばかりでなく、「毎年カラハーン qara-khan (哈喇罕) 一人、ホジャ一人を派し、各城のブヘーラ人の戸口・賦役を按じて造冊し、老弱を開除する」(實錄・乾隆三〇年一〇月甲寅)やうな制度も定められてゐた。ただ、事實としては、秋の收穫期に「六城」の地方へ派遣されたジュンガル王國の徵稅官、いはゆるデムチ denchi (德墨齊)¹⁶⁾が「種ゑられてゐる穀物を眼の前で收穫させてブヘーラ人と折半し、その後さらに稅糧十分の一を徵收」(回疆通志・卷二)¹⁷⁾したり、元々不輸租地である寺領 waqi からも徵稅したりするだけではなく、「およそ販運の各貨物から金・銀・布帛に及ぶまで、多く額外において例を越えて抽收し」(回疆志・卷四)、あるいは「臨時稅 geneden ? (格訥坦) の名目で、隨時に、必要に應じて、ブヘーラ人から様々のものを取立てて官吏の給與に當て」(實錄・乾隆三〇年一〇月甲寅)たりするやうな徹底的な收奪を行つた。原則的には「ブヘーラ人の賦稅ははなはだ輕かつた」にも拘らず、實際には「すこぶる重く、かれらが完納できなかつた」といふ矛盾した記述も決して怪しむに足りない。「カシュガル・ヤルカンド・アクス・ホータンの

四大城に駐在するジュンガル王國の官吏が、ブヘーラ人の銀錢・良馬・婦女・鳥鎗などを恣に掠奪した」(回疆志・卷四)といふに至つては論外である。

① Hartmann, *ibid.*, S. 211.

② Shaw, *ibid.*, p. 37.

③ 陳誠・李暹・西域番國志(哈烈條)

交易通用銀錢。大者重一錢六分。名曰等哥 *tenge* (tangar, tanka)。次者每錢重八分。名曰抵納 *dinar*。又其次者每錢重四分。名假即肩 *asper*。此三等錢。從人自造。造完於國主處。輪稅用印爲記。交易通用。無印記者不使。假即肩之下。止造銅錢。名曰蒲立 *pu*。或六。或九。當一假即肩。錢惟於其地使用。不得通行。

④ G. Le Strange, *Calvijo, Embassy to Tamerlane 1403-1406*, p. 232, 351, 359.

Forsyth, *Report of Mission to Yarkand*, p. 494.

⑤ 筆者はかつて、問題の六萬七千テンゲの内譯を、それぞれはつきりと物納・錢納・物納及び錢納の三者に區別した。しかし、嶋田氏が「清代回疆の人頭稅」(史學雜誌・六一、二一・三三—六頁)で理路整然と指摘されたところによると、これは明かに筆者の誤解であつたらしい。ただ、事實全部が錢納だつたかどうかについては、今なほ多少の疑問なきを得ない。本文に引いたフィリゾフの報告にも、そのやうな事柄は全く見えてゐない。

- ⑥ 嶋田襄平氏・「清代回疆の人頭税」・史學雜誌・六一ノ一一・三七頁。「諸項謀生の人」が準噶爾方略では「諸項の匠役」になつてゐることも嶋田氏の論文によつて知ることができた。
Forsyth, *ibid.* 495.

- ⑧ 前掲西域番國志（前條に續いて）

斗斛不置。止用權衡。權衡之制。兩端設鑒。分中爲準。置大小鐵石。分斤兩。輕重於一盤。中以爲度。雖五穀亦以盤稱。其斤兩之則。各處不同。無一定之制。

- ⑨ 永貴等・回疆志（卷四・賦役）葉爾羌の條

正項糧。二千五百六十巴特瑪・六噶爾布爾・五察拉克。每一巴特瑪。合倉石糧五石三斗。計算共計糧一萬三千二百八十六石一斗八升九合。同書、卷三・交易の條によれば、一巴特瑪Ⅱ八噶爾布爾Ⅱ六四察拉克Ⅱ六百四十斤である。フオアサイスの報告書（p. 495）では、1 batman = 8 glibar = 64 charak とあつて、やはり八進法であるが、一チャラクガ二〇ポンド、一ジルバルが一六〇ポンド、一バトマンは一・二八〇ポンドと換算されてゐる。

⑩ 前註によつて、バトマンが元來重量單位であり、これを容量單位とするのは中國的な便法にすぎないことは、ほとんど疑ひがない。しかも、バイコフの報告には、ロシア使節の一行は、ジュンガル王國滞在中「一人あたり、毎日、一バトマンの燃料を供給された。」とあつて、更にこれを確かめることができる。ただ、バイコフによれば、一バトマンは一ポンド半とされてゐるが、バツデレーはザハロフに従つて、その一

○ロシア・ポンド（九英ポンド）であるべきことをいつてゐる。Boddeley, *ibid.*, p. 144 & n. 2.

- ⑪ 参照。

- ⑫ Dutreuil de Rhins, *Mission scientifique dans la Haute Asie*, tome III, p. 230.

- ⑬ Baddeley, *ibid.* p. cxxxix-cxxxix.

- ⑭ ベルトリド・前掲書、四二二—四二三頁。

- ⑮ 拙稿・「異民族統治上から見たる清朝の回部統治政策」（『清朝の邊疆統治政策』所收）一八〇—一八一頁。

- ⑯ 德墨齊。内則佐台吉。以理家務。外則抽收牧廠稅務。差派征收山南回部徭賦。接待布魯特使人。其員缺有二。（西域圖志・卷二九、官制一）

- ⑰ 嶋田氏によれば、ジュンガル直轄領における徵稅法と解されてゐる。（前掲論文、三五頁）

- ⑱ Hartmann, *ibid.* S. 226—227.

結 び

ジュンガル王國の勃興・發展の蔭にあつて、ブヘーラ人が演じた役割は大体以上に述べた通りである。それらは必ずしも強制されたものばかりではなかつた。サルトとしての活動などは、兩者の間に存在した相互依存關係を物語るものとして、差當り最も注意されねばならないであらう。

このやうな状態において、カルムック族は當然にブヘーラ人からの文化的影響を受けた。ロシア文化や中國文化の影響も受けたが、何といつても、ブヘーラ人の文化的影響を最も強く受けた。農耕にしても、火器の使用にしても、カルムック族はこれをブヘーラ人から學んだのであつた。もつとも、それにはおのずから限界があつたことも事實である。プーチンが、既に注意したやうに、結局火器の使用に習熟したブヘーラ人にはかならなかつたことや、中國史料による限り、ジュンガル王國の崩壊後、ジュンガリアのカルムック族で農耕を営む者がほとんどなかつたらしいこと、などはこれを物語つてゐる。一つには、カルムック族にブヘーラ人に依存する考へが餘りも強かつたことが、また一つには、カルムック自身の能力が未だこの限界を越えるまでには達してゐなかつたことが、その原因であらう。しかも、ブヘーラ人との關係を通じて急速にその生活水準が向上したジュンガル王國の支配階級は、も早タランチャやカルムック族の農耕地からの收穫では満足することができず、アルバトツであるブヘーラ人から「穀麥の收穫の時に當つては、歳ごとに十の三、四を納めることを常とし」

收奪・掠奪を恣にするによつて、結局かれらを離叛させることになつた。そればかりではない。なほ多分に氏族社會の名残りを留めてゐたといはれるカルムック族の内部でも「ダルハン（達官）貴人は、夏日には酪漿・酸乳・麥飯を食し、冬日には牛羊肉・穀飯を食するのに、貧人はただ乳茶を飲んで暮らす」と傳へられてゐる通り、貧富の差が大きくなる一方、支配階級の間でも利害關係から紛争がだんだんはげしくなつていつたらしい。一七四〇年に、ジュンガル王國と清朝との間にアルタイをもつて兩國の國境とするといふ條件で最終的な媾和條約が結ばれ、ブヘーラ人の中國貿易が清朝の嚴重な統制下におかれるやうになつて、カルムック族とブヘーラ人との相互依存關係が破局に直面してから僅々十數年で、相つぐ内紛のために、ジュンガル王國が忽ち瓦解し去らねばならなかつた事實は、この間の消息を物語つてゐるであらう。ただその詳しい經緯については更めて考へて見なければならぬ。

- ① 西域圖志・卷三三、屯政二・附戶口の條に、伊犁に土爾扈特屬衆養種地之額魯特。六千五百十四名口、博羅塔拉に同じく八百二十七名口と見えるのが、ほとんど唯一の例である。
- ② 「内はいづれも西域圖志・卷三九、風俗の條からの引用である。」（昭和二八・一〇・一二）

附記 本論文は文部省科學研究費による研究の一部である。

Kingdom of Jungar-Kalmuks and Bukharians

Akira Haneda

The inhabitants of Eastern Turkistan, so-called Bukharians, played an important rôle in the history of the Kingdom of Jungar-Kalmuks in the 17th and 18th centuries. The author endeavoured, in the present monograph, to make their rôle clear, by investigating their activities 1) as agricultural settlers (taranči) in Jungaria, 2) as agents of the Kalmuk princes (sart), 3) as technical experts, especially as artilleries (pūčin) in the Kalmuk army, and 4) as tributaries (albatū) of the Kingdom of Jungar-Kalmuks.